

研修成果報告書

私は、8月15日から4日間、小豆島にて児童に関わるボランティア活動を行い、地方の福祉活動の現状を知る機会とした。小豆島は都会に比べて児童や若者に対する支援への理解が乏しく、人手不足・支援不足が起こっている。このように普段とは異なる環境で、実際に児童、そして障がいを持った児童の母親と関わることで学んだことが3点ある。

1点目に学んだことは、島という閉鎖的空間についてである。今回のボランティアでは、小豆島で若者支援の活動をされている方やスクールソーシャルワーカーの方とお話をさせていただいたが、「周りの目」が引き起こす問題についてのお話が非常に多いように感じた。

例えば、配食サービスを受けていることが、家の前に停まる車で分かってしまうから困るという内容だ。他にも制服を買うお金が無いことを知られたくないなど、支援を受けていることが恥ずかしいという考えが都会よりも根強く、過敏であるように感じた。

都会にも、生活保護等の支援を受けることが恥ずかしいという自身の考えはあるが、地方に比べて良い意味でも悪い意味でも他人に興味がない。毎週同じ時間に同じ車が停まっていることで、配食サービスを受けていると気づく人は少ないだろうし、気づいたところでそれを隣人に言いふらそうとするほどのご近所関係は今の東京にはないだろう。

私は、地方の支援不足や人手不足について考える際、隣人同士で協力すれば良いという考え方を持っていた。都会よりも人と人との関わりが深いことから、相互確認し合う関係性が構築できれば、それが介護の代わりになり、介護予防にもなり得ると考えていたのである。しかし今回、実際に島という場所で活動を行って、むしろ地方の方が相互協力という考え方は浸透していないのではないかと感じた。

島や村のように、閉鎖的な空間では相互協力の関係を構築するよりも先に、福祉という考え方を浸透させることが必要である。私が考えている以上に、地方では福祉に関する理解が遅れている。部落の問題がいまだに強く根付いているし、自閉症は親の教育の責任であるという考え方が多い。社会的弱者を受け入れる体制が整っていないため、問題を抱えている人が声を上げにくくなるという悪循環が出来上がっているように感じた。

地方における理解不足を改善するには、やはりまず教育が必要である。正しい知識を学校で教えること、そしてそれを学んだ子どもたちをつぶさないようにすることで、島内の理解は深まっていくのではないかと感じた。

現在、理解が遅れている世代は、学校で教育を行うことは出来ないが、ソーシャルワーカーや社協などが正しい知識を広めていく必要がある。非常に難しいことではあると思うが、地方にも確実にソーシャルワーカーを増やしていくことで福祉活動も活発になるのではな

いかと考える。

知識を広める人手が充分であれば、相互協力が可能になるはずである。地方における高齢者の孤立化や、障がいを持つ親の精神的健康などの問題は少しずつ改善されていくのではないかと私は考える。

2点目は、島の子どもたちと交流をもったことである。今回の活動では、自閉症や多動性障がいの傾向が見られる子どもたちと実際に関わることが出来た。自閉症の子どもたちと関わる機会を持ったことは今までなかったため、非常に戸惑うことが多かった。私自身が、どう返事をすればよいか分からず戸惑ったことはもちろん、他の子どもたちとどのような関わり方をさせればよいか全く知識がなかったため、1人でほったらかしにしてしまう場面が何度かあった。私の行動によって不快な思いをさせる恐れがあるということを実際に関わることで改めて実感できたと感じる。

これまで、障害者心理学等の授業を通して、自閉症の特徴や関わるうえで気を付けるべきことなどは学んでいたつもりであったが、実際に話をするとなかなか注意は出来なかったと感じる。曖昧な表現を多用してしまったことや、いろいろな方向から話してしまったことで少しパニックを起こしてしまう等、やはり経験を重ねていないと慣れることが出来ないと分かった。これは自閉症だけに言えることではなく、全てのことに言えるはずだ。社会福祉士として活動する際や、実習に行く際、支援対象者と直接のかかわりを持つ際は、可能な限り知識を入れておくことが重要である。また、出来るだけボランティア等に関わる機会を持っておくことも必要だと感じた。経験を積んでおくことで、実際に活動する際の自信につながる。

さらに、今回の活動では、島という場所が障害となっている子どもたちと話することもできた。中学生の進路について、東京ではあまり聞かないような相談を受けたことが非常に印象に残っている。このような相談を受け、やはり小豆島のように閉鎖された空間では子どもたちの考え方も偏ってしまいがちになるのではないかと考えた。島から出る必要はない、早く手に職をつけるべきだ、などの親の考えを押し付けられ、将来の選択肢を狭められている。

このような状況においてまず大切なのは、子どもたちに自由な選択肢を与えることではないかと私は考える。子どもたちが窮屈な考え方の中で育ってしまうと、いつまでたっても島全体としての考え方が改善されない。島を出たり、高校で勉強をしたり、やりたいことをやりたいように出来る環境を作りが必要である。

深く根付き、しみついてしまっている考え方を変えるというのは非常に難しいことである。しかし、この問題は小豆島に限らず過疎化の進む地方全般に共通している問題であるため、ソーシャルワーカーの活動として、何が出来るのか考えたい。

3点目は、子ども食堂の運営について、実際に経験できたことが大きな収穫だと言える。これまでも何度か子ども食堂にボランティアとして参加したことはあったが、それらはすでにイベントとして形式が決まっており、決まり通り動けば大きな問題は発生しないよう

になっていた。しかし小豆島は、高齢者に対する支援が中心であり、児童やその家族に対する支援という考え方がまだ浅い。子ども食堂の取り組みに関しても、まだ 2 回目ということで基礎が固まっておらず、まだまだ改善の余地があるように感じられた。

まずは運営側の情報共有の甘さである。参加者の中には、アレルギーの関係で食事に制限のある児童がいたにも関わらず、共有が甘かったために知らずに食べさせてしまうところであった。アレルギーは命にもかかわる問題であるから、確実に共有しておくべき内容であるし、参加することが分かっているのであれば可能な限りアレルギーの食品は抜いておくべきではないか。

次に、子どもたちの対応法である。子ども食堂でボランティアを行うということは、もちろん私にも子どもの命を預かっているということである。しかし、今回の子ども食堂では、調理の間に子どもたちが海などで自由に行動しており、わずかな運営の人数では到底管理しきれないのではないかと感じた。子どもたちの安全を第一にした会にすることを考えなければ、子ども食堂自体続けられなくなるだろう。

今回、私がいままで普通に見てきたものが、決して当たり前ではないということに気付くことが出来た。このように、企画の立ち上げに関わることで、問題点がより明確に理解できる。学生はこのような立ち上げの現場にたくさん関わっておくべきであると感じた。

今回、小豆島での活動を通して、私は以上の 3 点の内容を成果として得ることが出来たと考えている。今後も実践的活動を積極的に行うことはもちろん、企画を起こす活動に参加するという経験も非常に貴重な経験になると感じた。3 年次の実習までに、まずは知識と、もう少し実践での経験を積めたらよいと考える。